

## 明治期和訳聖書における〈教会〉訳語

井料, 佐紀子  
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/19512>

---

出版情報 : 文献探究. 47, pp.1-10, 2009-03-31. 文献探究の会  
バージョン :  
権利関係 :

# 明治期和訳聖書における〈教会〉訳語

井 料 佐 紀 子

## 0. はじめに

日本語史において、幕末から明治期にかけて創出された多くの新漢語の存在は大きなものであり、それらに関する論考も数多い。しかしながら、発表者が現在まで対象としてきた明治期和訳聖書（以下「翻訳委員会訳」）に関連するものは、日本語語彙史という観点からはさほど多くない。

筆者はこれまで、新漢語に翻訳委員会訳が果たした役割は小さくないこと、またそこにおける翻訳語を調査することによって語史に新たな視点を付け加えることができることを主張してきた（拙稿(2001)、(2007)）。

翻訳委員会訳の訳語の多くが漢訳聖書に依っていることは先行研究のとおりであり（森岡(1969)、海老沢(1981)、永嶋(1999)など）、その漢訳聖書の中でも BC 訳（後述）への依存度は語彙・文体ともに高いとされている。

しかしながら、BC 訳以外の漢訳聖書を軽視することの危険性も指摘されており（土岐・川島(1987)、鈴木(2005)）、発表者も、聖書和訳事業において他の漢訳聖書も参看されていた以上、他の漢訳聖書も BC 訳と同様に調査対象とすべきだと考える。

よって本稿では、幕末から明治期に創出された「教会」という語を対象とし、訳語「教会」の日本語語彙への流入経路を調査し、以下の2点を目的とする。

- (1) BC 訳以外の漢訳聖書も和訳聖書の訳語採用に影響を与え得たことを証明する。
- (2) 明治期和訳聖書あるいはその周辺資料における〈教会〉<sup>1</sup>語史の一端を明らかにする。

## 1. 先行研究とその問題点

和訳聖書（特に翻訳委員会訳）を対象とした日本語史研究のうち、まとまったものとしてはまず森岡(1969)所収「新約聖書の和訳」「旧約聖書の和訳」があげられよう。

「新約聖書の和訳」では翻訳委員会訳の訳語が5つに分類されている（(1)漢訳と同一の音読の語(2)漢訳を訓読した語(3)漢語を意読した語(4)一字漢語を二字に修正した語(5)漢訳と異なる語・下線部筆者）。森岡の言う「漢訳」とは「明治一二年日本で復刻された漢訳聖書（上海版）(p.171)」、すなわち BC 訳である。

語群(4)(5)に関して、森岡は「和訳聖書は漢訳聖書を日本語に書き下すにあたって、決して直訳的な方法を取らず、日本語としてすでに熟した語がある場合には自由に適当なものを

選んだと考えられ(p.185)」「聖書用語という点からみると、漢訳を修正もしくは変更した(4)(5)群の中には、重要な概念がほとんど含まれていない。ただ、唯一の例外として、「バプテスマ」があるが(中略)、(4)(5)において、漢訳を修正もしくは変更したのは、聖書用語として、それほど重要視する必要がなかったからだと考えられる(p.187)」「聖書用語としての重要度が低く、しかも漢訳をそのまま取り入れにくいものは、適宜、日本語として熟したものに言い換えたが(p.188)」（傍線筆者）とする。

しかしながら、翻訳委員会がその業にあたって参考にしたものはBC訳だけではなく（「福音新報」1088号(1915)における井深梶之助の談話など）、土岐・川島(1987)においても、森岡(1969)の調査結果に他の漢訳聖書（代表訳・官話訳（後述））を加えて任意に調査し直した結果、「次々に問題点が指摘できる(p.140)」としている。

よって、森岡(1969)の語群(4)(5)は、必ずしも「聖書用語として、それほど重要視する必要がなかったから」「適宜、日本語として熟したものに言い換えた」ものではなく、他の漢訳聖書の影響によって「漢訳（BC訳）と一致していない、という可能性も考慮に入れるべきだと考える。その点を踏まえた上で、本発表の調査に用いる漢訳聖書は以下の5点である（うち(4)MM訳(5)バセー訳は、翻訳委員会訳では直接参看されていないが、(1)～(3)の漢訳聖書の源流として重要であるため参照した）。

#### (1)BC訳（ブリッジマン＝カルバートソン訳）

…1859年「新約全書」、1862～3年「旧約全書」。用語問題（ターム・クエスチョン）を契機として分裂した委員たちのうち、米国系の委員が中心となった。

（ゆまに書房(1999)『幕末邦訳聖書集成 新約全書』（国際基督教大学図書館所蔵本の複製）<sup>2</sup>）

#### (2)代表訳（Delegates' Version）

…1852年「新約全書」、1854年「旧約全書」。英国系委員が中心。

（日本聖書協会聖書図書館蔵のマイクロフィルム）

#### (3)官話訳（シェレシェフスキー訳）

…1866～8年「新約全書」（シェレシェフスキーと数名の委員たちの共訳）、1874年「旧約全書」（シェレシェフスキー単独訳）。

（日本聖書協会出版部蔵のマイクロフィルム）

#### (4)MM訳（モリソン＝ミルン訳）

1814年「新遺詔書」、1822年「旧遺詔書」（合本1824年「神天聖書」）。

（ゆまに書房(1999)『幕末邦訳聖書集成 13～16 新遺詔書』（立教大学図書館所蔵本の複製））

#### (5)バセー訳（四史攸編）

四福音書（厳密にはこの部分のみが「四史攸編」）、また、使徒行伝～ヘブライ人への手紙一

章まで。1702 年ごろ訳出か。MM 訳（特に新約）に多大な影響を与えた。

（日本聖書協会聖書図書館蔵のマイクロフィルム）

また、本稿で用いる翻訳委員会訳は 1880 年『新約全書』（『近代邦訳聖書集成③』所収 山梨英和短期大学門脇文庫所蔵本の複製）を参照した。

## 2. 本稿で扱う訳語「教会」について

試みに、森岡(1969)において語群(4)(5)に分類された訳語のうち、キリスト教に関連する訳語を抜き出してみると、「律法」「聖殿」「悪鬼」「教会」「信仰」「姦淫」「悪魔」「聖宮」（いずれも翻訳委員会訳）が挙げられる。その中から、森岡(1969)で調査された箇所(マタイ 18-17)の「教会」について、口語訳（1954）とともに該当部分を挙げる。

[口語訳] もし彼らの言うことを聞かないなら、教会に申し出なさい。もし教会の言うことも聞かないなら、その人を異邦人または取税人同様に扱いなさい。

[翻訳委員会訳] もし彼等にも聴きかずば教会に告つげよもし教会に聴きかずば之を異邦人かつこれ 税吏いほうじんのごとき者ものとすべし

翻訳委員会訳の訳語「教会」は、『日本国語大辞典（第二版）』によると、初出は 1877 年の『米欧回覧実記』（該当箇所は 1872（明治四）年の記事）。1880 年の翻訳委員会訳聖書も用例として採用されており、「教会」は、幕末～明治期につくりだされた新漢語であり、翻訳委員会訳はその初期のものと考えてよいだろう。

また、マタイ 18-17 の漢訳聖書（翻訳委員会が直接参看したと思われるもの）における該当箇所は以下のとおり。

[BC 訳] 若不聴彼、則告於会、若不聴会、爾則視之如異邦人與税吏也。

[代表訳] 弗聴則告於会、弗聴会、則視之猶異邦人與税吏可也。

[官話訳] 若不聽從他們、就告訴教会、若不聽從教会、就将他看做外邦人和税吏一樣。

翻訳委員会訳は代表訳・BC 訳とは一致していない（「教会」／「会」）が、翻訳委員会訳の席上にあつた官話訳とは一致している（「教会」／「教会」）。つまり、翻訳委員会の訳語「教会」は、官話訳と関連がある可能性がある。結論を先に述べると、官話訳との関連のみで訳語採用が行われたのではないにしても、その可能性はかなり高いと考えられる。

### 3. 調査

#### 3.1. 〈教会〉とは

聖書における〈教会〉は、新約聖書においては、ギリシア語 **ἐκκλησία**(ekklēsia)と訳される。原語はヘブライ語 qahal。

ekklēsia はそもそも「呼ぶ」あるいは「召集する」という動詞 **ekkeleo** から生じたものであり、原義的には「神の発意によって召集された（キリスト者の）集合」である。すなわち、現代日本語でいう「坂の上に教会がある」のような、建物・場所としての〈教会〉は、原義的には含まれない。

ただし、キリスト者が集まるということは場所が必要であり、その場所（あるいはその部屋、建物など）を示す語もあり、それは、**συναγωγή**(sunagoge)という語でもあらわされる（異邦人（ユダヤ教徒）の集まる場所・建物として用いられる場合が多い）。『旧約新約 聖書語句大辞典』には「会堂」という語で立項されている（この辞典は、「口語訳(1954)」を基につくられている）。

以上をまとめると、ギリシア語 **ekklēsia** は聖書においてはキリスト者の集合・集団であり、原義的には建物・場所を意味しない。一方、同語から派生した **sunagoge** は建物・場所を意味する。

#### 3.2. 漢訳聖書における〈教会〉

##### 3.2.1. バセー訳・MM 訳における〈教会〉

代表訳・BC 訳・官話訳以前の漢訳聖書（すなわちプロテスタント布教時代以前におけるカトリック布教時代の聖書）においては、**ekklēsia**（集団・集合）の〈教会〉訳語は「会」「教会」両形があらわれるが、数の上では「会」が圧倒的に多く（バセー訳 45 例、MM 訳 68 例）、「教会」は使徒行伝に数例（バセー訳 9 例、MM 訳 7 例）である<sup>3</sup>。

##### ◆マタイ 16-18（バ・MM 「会」）

【口語訳】そこで、わたしもあなたに言う。あなたはペテロである。そして、わたしはこの岩の上にわたしの教会を建てよう。黄泉の力もそれに打ち勝つことはない。

【バセー訳】我乃謂尔尔為石且夫石上我将建我会而地獄諸門弗克勝之

【MM 訳】我又語爾、以爾名為石者、而在此石上我将建我会而地獄之門不致勝之。

##### ◆使徒行伝 8-1（バ・MM 「教会」）

【口語訳】その日、エルサレムの教会に対して大迫害が起り、使徒以外の者はことごとく、ユダヤとサマリヤとの地方に散らされて行った。

【バセー訳】此日教会大遭捕害列使徒外其余皆散于撒瑪列如達諸方

【MM 訳】当時教会在于耶路撒冷大遭捕害、列使徒外、其余皆散于撒馬利亞如大諸方。

バセー訳の段階ですでに翻訳委員会訳と同形の「教会」が集合・集団の〈教会〉訳語として採用されているが、その数は前述のとおり少なく、MM 訳はほぼバセー訳の訳語を踏襲している。

ここで、MM 訳の訳業に携ったモリソンによる英華辞典(1850)を見る（英文は筆者が日本語訳をした）。

CHURCH キリスト者の団体。ローマ・カトリックたちは「会」、「天主会」と表現した。(略)「Hwuy (会)」は、中国人たちの派、あるいは集団をあらわす一般語であり、彼らが「会」とよんでいるさまざまなあつまり、あるいは宗教的な集団がある。

CHURCH 集まりの場所。ローマ・カトリックたちは「天主堂」とよぶ。礼拝のための堂は中国で「廟」とよばれている。<sup>4</sup>

モリソンは〈教会〉を二つに分類し、ローマ・カトリックでは「集団としての〈教会〉」は「(天主) 会」、「建物・場所としての〈教会〉」は「(天主) 堂」「(廟)」だとする。その認識は、バセー訳（バセーはパリ外国宣教師会（カトリック）所属）の訳語採用の状況と一致する（マルコ 1-21 「入加法農撒罷進会堂訓衆」など）。モリソンも自らの聖書翻訳で「会堂」を sunagoge（建物・場所）の訳語として採用している<sup>5</sup>。

【バセー訳・MM 訳の〈教会〉】

集合・集団	「会」「教会」
建物・場所	「会堂」

### 3.2.2. 代表訳・BC 訳における〈教会〉

ekklesia 訳語採用の状況は、バセー訳・MM 訳（「教会」より「会」が多い）から大きく変わってはいないが、多少の変化は見られる。MM 訳より代表訳のほうが、そして代表訳より BC 訳のほうが「教会」を訳語として採用する数が増えている<sup>6</sup>。

◆マタイ 16-18（代「会」・BC「会」）

[代表訳]我又語爾、爾乃彼得（彼得乃磐之謂）我将建我会於此磐、而陰府不能勝。

[BC 訳] 我又語爾、爾乃彼得我将建我会於此磐上、而陰府之門不能勝之。

◆使徒 8-1（代「(聖) 会」・BC「教会」）

[代表訳]當時在耶路撒冷聖会、大遭窘逐、使徒而外、皆散處猶太、撒馬利亞諸地。

[BC 訳]當時在耶路撒冷之教会、大遭窘迫、使徒而外、皆散於猶太、撒馬利亞之諸地。

sunagoge 訳語の〈教会〉は、BC 訳の一箇所（黙示録 2-9 「党」）を除き、すべて「会堂」

と訳出されている（BC 訳マルコ 1-21「衆進迦百農、即於安息日、入会堂教誨」など）。

【代表訳・BC 訳の〈教会〉】

集合・集団	「会」「教会」
建物・場所	「会堂」

### 3.2.3. 官話訳における〈教会〉

官話訳にいたって、訳語採用の状況は大きく異なる。ekklesia 訳語の〈教会〉は 2 例（「会」と「会堂」<sup>7)</sup>）をのぞきすべてが「教会」と訳出されている。これは翻訳委員会訳の訳語採用の状況と重なる。

◆マタイ 16-18

[官話訳]我又告訴你、你是彼得〈彼得即磐石之意〉我要立我的教会在這磐石上、陰間的權柄不能勝他。

◆使徒 8-1

[官話訳]那時候、在耶路撒冷的教会、大遭逼迫、除了使徒以外、門徒都分散在猶太和撒馬利亜各地方了。

sunagoge の訳語は一箇所（ルカ 21-12「公会」）を除き、すべて「会堂」である。

### 3.3. 翻訳委員会訳

翻訳委員会訳では、1 例（使徒 5-11「全会」）<sup>8)</sup>をのぞきすべての ekklesia 訳語の〈教会〉は「教会」と訳出される。この訳語採用の状況は、3.2.3.で述べたとおり、官話訳の状況と重なる。

◆マタイ 16-18

[翻訳委員会訳]我<sup>われ</sup>また爾<sup>つげ</sup>に告<sup>つげ</sup>ん爾<sup>つげ</sup>ハペテロ<sup>つげ</sup>なり我<sup>われ</sup>教会<sup>けうくわい</sup>をこの磐<sup>いは</sup>の上に建<sup>たつ</sup>べし陰<sup>よみ</sup>府<sup>もん</sup>の門<sup>もん</sup>ハ之<sup>か</sup>に勝<sup>かつ</sup>べからず

◆使徒 8-1

[翻訳委員会訳]此<sup>この</sup>日<sup>ひ</sup>エルサレム<sup>ある</sup>に在<sup>あ</sup>るところの教会<sup>けうくわい</sup>を大<sup>せむ</sup>に窘<sup>む</sup>迫<sup>る</sup>こと起<sup>おこ</sup>り使<sup>し</sup>徒<sup>と</sup>等<sup>たち</sup>の外<sup>みな</sup>は皆<sup>みな</sup>ユダヤ<sup>ち</sup>とサマリア<sup>ち</sup>の地<sup>ち</sup>に散<sup>ち</sup>されたり

sunagoge の訳語は、翻訳委員会訳ではすべて「会堂」である（「彼等カペナウムに至るイエス即ち安息日に会堂に入て教を為しに」（マルコ 1-21）など）。

【官話訳・翻訳委員会訳の〈教会〉】

集合・集団 「教会」  
建物・場所 「会堂」

#### 4. 聖書以外の周辺資料における〈教会〉

##### 4.1. 外国語辞書

まず、ロプシャイドの英華辞典(1866-69)をしてみる(英文は筆者が日本語訳をした)。

CHURCH 神への礼拝に捧げられる建物(\*真神堂という語が多くのミッションで使われる)。礼拝堂、上帝堂。ローマ・カトリックでは天主堂、天主聖殿。

キリスト者の集合的な団体。聖会、耶蘇教会、公会、戦聖会、天主教会、羅馬教会、英国教会、(中略)希臘教会(後略)。

3.2.1.で挙げたモリソンの辞典における認識(集合・集団の〈教会〉=「会」、建物・場所の〈教会〉=「堂」と一致する。「耶蘇教会」「天主教会」「羅馬教会」「英国教会」「希臘教会」という訳語は、「聖/会」「公/会」から考えて、「耶蘇教/会」「天主教/会」といった語構成ととらえるべきであり、「教会」が集合・集団の〈教会〉訳語として採用されたときまでは言えないが、「耶蘇/教会」「天主/教会」といった異分析がされる可能性は否定できない。この点は本稿において重視すべき問題ではあるが、この問題の解決は稿を改めたい。

また、オランダ語辞書系統の辞書類には訳語「教会」は見られない([英和对訳袖珍辞書1862]church, 寺、膽礼堂/[和訳英辞書(薩摩辞書)1869]church, <sup>テラ センレイドウ</sup>寺。膽礼堂。礼膽。講中。)<sup>コウチウ</sup>。

##### 4.2. ヘボン『和英語林集成』

(英和の部)

[初版1867]CHURCH, Dō. (堂)

[再版1872]CHURCH, Kuwai-dō. (会堂) Kiyō kuwaidō, (教会堂), kiyō-kuwai. (教会), kirisitan shūmon. (キリシタン宗門)

[三版1886]CHURCH, Kyōkwai, (教会), Kyōdō(教堂), kwaidō, (会堂).—government, kyōkwai-seiji. (教会政治) — history, kyō-kwai-rekishī. (教会歴史)

(和英の部)

[初版・再版](該当語なし)

[三版]KYŌKWAĪ, ケウクワイ 教会 a religious assembly, church:

KYŌDŌ, ケウダウ 教堂 a church(building).



翻訳委員会訳より先に出版された再版（英和の部）において”kyo kuwaido”, ”kyo kwai”という語が見られるが、実際の版を見ると「教／会堂」の語構成に見える（「教会」は、改行を含むため語構成はあきらかでない）。

## CHURCH, *n.* Kuwai-dō, kiyō kuwaidō, kiyō-kuwai, kirishitan shūmon.

（再版・英和の部）

初版・再版（和英の部）には、「教会」「教堂」（「教会堂」「会堂」）は立項されていない。三版に至って初めて「教会」「会堂」が和英の部で立項され、集合・集団の〈教会〉は「教会」、建物・場所の〈教会〉は「教堂」と分けられている。これら（特に集合・集団の〈教会〉訳語）は、やはり聖書訳業を通じての訳語採用と考えられる。

### 5. 結論

調査結果は、以下の3点にまとめられる。

- (1) 集合・集団の〈教会〉は、カトリック布教時代のバセー訳からプロテスタントのMM訳、代表訳、BC訳へ至るまで大きく変化はせず、「会」あるいは「教会」と訳出されてきた。しかしながら、「会」のほうが優勢であり、「教会」は少数であった。
- (2) 官話訳では、集合・集団の〈教会〉はほぼ「教会」と訳出され、それは翻訳委員会訳へと受け継がれる。
- (3) 建物・場所の〈教会〉は、漢訳聖書においては、バセー訳から官話訳に至るまでほぼ（MM訳の一部「公所」「会所」をのぞいて）「会堂」と訳出されてきた。英華辞典においても、建物としての〈教会〉は「堂」字を含むものが多い。翻訳委員会訳においても漢訳聖書にならない「会堂」と訳出された。

本稿では、聖書あるいはそれに関連する資料における〈教会〉訳語の調査を行った。しかしながら〈教会〉訳語のふるまいの全貌が本稿で明らかになったわけではない。聖書を通じて流入した訳語「教会」／「会堂」（「教会堂」「教堂」）がどのように日本語の一般語彙に定着あるいは淘汰されていったのか、という問題が残る。その点については、稿を改めて調査を行いたい。

## 注

- <sup>1</sup> 本稿での〈 〉付きの〈教会〉は、概念としての教会をあらわす。
- <sup>2</sup> それぞれの漢訳聖書の末尾（ ）内は、本稿で参照した資料である。
- <sup>3</sup> 鈴木(2006)では、「イケレイジア（キリシタン用語・筆者註）」に対応する語として、パセー訳では「教会」のみを挙げている(p.23)が、筆者の調査した限りではパセー訳には「会」「教会」両語があらわれているので、この記述は疑問が残る（ただし、用例の多寡を問題にしているのではなく、両語があらわれているという事実を記述していない点において）。
- <sup>4</sup> 原文：CHURCH body of Christians, the Roman Catholics have expressed by 会、天主会（略）Hwuy 会 is common word for sect or association amongst the Chinese, and they have various brotherhoods and religious associations which they called hwuy. / CHURCH a place of assembling, the Roman Catholics call 天主堂. The churches of temples for worship in China called 廟.
- <sup>5</sup> ただし、MM 訳においては「公所」「会所」「会堂」の三つの訳語が採用されている（「会堂」は使徒行伝部分のみで、部分的な偏りが見られる）。パセー訳では 1 例（「教会堂」（マルコ 1-23））をのぞいて「会堂」が採用されている。
- <sup>6</sup> この結果が「教会」が「会」よりも〈教会〉訳語として適切であると考えられるようになったことを示している、とは筆者は考えていない。それぞれの箇所には聖書本文の解釈の違いがあると考えられる。したがって用例数の増加が直接的に訳語としての適性があがったことを示すわけではないであろう。
- <sup>7</sup> 「会堂」はコリント I 4-17 にあられ、「彼は、キリスト・イエスにおけるわたしの生活のしかたを、わたしが至る所の教会で教えているとおりに、あなたがたに思い起させてくれるであろう（口語訳）」のように、場所としての〈教会〉と解釈できる例である（ただしギリシア語聖書では *ekklesia* である）。
- <sup>8</sup> 「ぜんくわい全会（代「全会」・BC「全会」・官「全教会」）の者とこれをきけ聞る者ども皆おほい おそ大に懼る」。代表訳・BC 訳を参考にしたか。
- <sup>9</sup> 原文：CHURCH, a house consecrated to the worship of God.(\*the term, 真神堂 is used by various missionaries.) 礼拝堂、上帝堂 among the Rom. Catholics, 天主堂、天主聖殿 the collective body of Christians, 聖会、耶蘇教会 the catholic Church, 公会; the invisible church, 聖公会、幽公会; the church militant, 戦聖会; the Roman Church, 天主教会、羅馬教会 the church of England, 英国教会（中略）; the Greek Church, 希臘教会（後略）

## [参考文献]

- 海老沢有道(1981)『新訂増補版 日本の聖書 聖書と訳の歴史』（日本基督教団出版局）
- 鈴木 広光(2005)「神の翻訳史」（『国語国文』74-2）
- 土岐健二・川島二郎(1987)「聖書翻訳史における元訳・口語訳・新共同訳」（『一橋大学研究年報 人文科学研究』27）
- 永嶋 大典(1999)「聖書邦訳史略述」（ゆまに書房『幕末邦訳聖書集成』別冊）
- 森岡 健二(1964)『近代語の成立 明治期語彙篇』（明治書院）
- 矢沢 利彦(1972)『中国とキリスト教』（世界史研究叢書 12 近藤出版社）
- 尊田佐紀子(2001)「明治期日本語訳聖書における訳語「悪魔」について」（『語文研究』91）
- 井料佐紀子(2007)「〈接吻〉語史 キリスト教用語の視点からの再構築」（『語文研究』103）

#### [辞典・辞書]

『旧約新約聖書大辞典』(1989)、『聖書語句大辞典』(1969)、『聖書象徴辞典』(マンフレート・ルルカー著 池田紘一訳 人文書院)、『聖書思想辞典』(1973)(X. レオン・デュフル編 Z. イェール訳)、『聖書辞典』(1926)(ヘボン・山本秀煌編)

#### [付記]

本稿をなすにあたり、資料の閲覧を許可していただいた日本聖書協会聖書図書館に深く感謝申し上げます。また、第 249 回近代語研究会ならびに第 225 回筑紫日本語研究会の席上で、多くの貴重なご意見を賜りました。ここに記して感謝申し上げます。

(いりょう さきこ・本学大学院博士後期課程)